2021年度岐阜県演劇大会　一日目　2校目　　≪講評文≫

岐阜総合学園高校

『愛して、ミッドナイト・ブルーノート・ハイライト』

◎　□　△　○　▽　☆　◎　□　△　○　▽　☆　◎　□　△　○　▽　☆　◎　□　△　○　▽

岐阜総合学園高校は、「ナウでヤングで独創的賞」です。

まず、「とにかくオシャレ」という声があがりました。

スモークを使った幻想的な雰囲気の幕開き、音響、照明のタイミングがセリフとぴったりリンクして高校生の感情や行動を音響やダンスなどを使ってオシャレに表現出来ていたと思います。

いわゆる演劇のセリフ、という感じじゃない独特なセリフのしゃべり方だけれど、それが演技くさくなく、自然な女子高生のノリやテンションを感じさせました。テンポ感に引き込まれました。テンポもよく独特な雰囲気に最後まで惹き付けられる劇でした。悩む？言い換え、言い間違いの訂正、そこが演技っぽくなくて、自然な感じがしました。

〈冷えピタ〉、〈押し花〉、〈おとぎ話〉、役名の名付けもオシャレで、セリフも言葉の積み重ね、意味の積み重ねと言うより、イメージの積み重ね。いわゆる「意味」を拒否したところに成り立っているような舞台でした。ストーリーもストーリーらしいものはなく、分かるのは、「書を捨てよ、街へ出よう」という寺山修司の言葉に、「書＝本」を捨てて東に向かって夜中歩き続ける〈冷えピタ〉と、「書＝手紙」を書いては捨て続ける〈押し花〉、それと学校の仲間たち。時間はずっと夜で、曇りで、暗い。スモークも曇りで夜の表現。それは多分、コロナ禍で、いろいろなことが制限され、押しつけられて、先行き分からない、そんな暗さの表現なのでしょうか。

そんな暗さの中、書を捨てた〈冷えピタ〉は、書は捨てたけれど、徹底して言葉について考えている。眠れない夜を過ごして、引きこもりのような生活を強いられながら、決して内向きではなく、でも通常より内を向きながら、書を捨てて街に出ている。世界に向かっている。暗いけど決して暗いばかりではない、オシャレで明るい、ナウでヤングで、最強、無敵な高校生の表現がこの『愛して、ミッドナイト・ブルーノート・ハイライト』なのだと思いました。

◎　□　△　○　▽　☆　◎　□　△　○　▽　☆　◎　□　△　○　▽　☆　◎　□　△　○　▽